

## インドネシア, スラウェシ島における衣生活 (第2報)

—— トラジャ族の伝統的社会構造と葬儀用衣装との関連 ——

古川智恵子・森川里子

### The Clothing Life in Sulawesi Island, Indonesia (Part 2)

—— The Relation between the Traditional Organization  
of society of Toraja Tribe and its Funeral Clothes ——

Chieko FURUKAWA and Satoko MORIKAWA

#### はじめに

前報では、スラウェシ島 Mamasa 地方における、トラジャ族の衣生活解明のための、伝統的社会構造について分析を行った。その結果、トラジャ族人生の中では、葬儀が幸福追求の最大の儀式であることが知見された。

したがって本報では、葬儀の衣装をとおして、伝統的社会構造と衣生活との関連について分析考察を試みる。

#### 調査方法

調査時期・調査地域は、第1報と同様である。

調査内容は、葬儀の進行に伴う葬儀用衣装(屍衣・主催者側・参列者側)に視点をおき、質問紙による面接、聞き取り、実物写真撮影、計測等の方法により、資料を収集し、分析考察を行った。

#### 結果および考察

##### 1. 村長の遺体と主催者側の葬儀衣装

図1は村長の遺体と家族である。図1-aは、葬儀の行われた村長の住居であり、東側の大屋根の下に新しく作られた屋根の部分は、葬儀中の来客のために増設された休息所である。弔問の来客は丁重に扱われ、主催者側は葬儀1ヵ月間もの間、食物や飲物を勧めたりするのは容易なことではないが、それを行うのである。

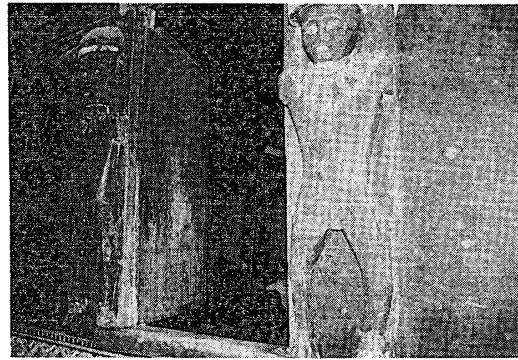
⑥は住居の床下であり、ここで家畜を飼育したり、子供を遊ばせたりするための構造になっている。⑦は住居の入口であり、入口の両側に人間の木彫りの彫刻が施されている。④は入口を入った所の部屋の中であり、そこに、このたび死去した村長の遺体が安置されており、家族が起居を共にしているのである。

##### (1) 村長の屍衣

村長の遺体(屍衣)は、ミイラにする専門職のメバラン(使用人階級)によって防腐された後、純白の布地を数百メートルも巻き付ける。布の長さは、死者の階級区分によって異なる。



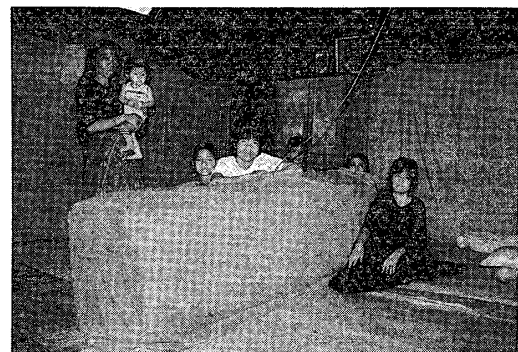
㉑ 村長の住居



㉒ 住居の入口



㉓ 高床住居の床下



㉔ 村長の遺体と家族

図1 村長の遺体と家族

その後、赤い美しい布でくるまれ、まるで大きな赤い木の幹のように仕上げられる。

## (2) 主催者側の衣装

### 1) マボロン (Mabolong) の慣習

トラジャ族の葬儀では、マボロン (Mabolong) と呼ばれる慣習がある。これは、死者の親族の衣装を黒く染めるものである。染料には、ゲリンテ (Gelinte) という木の実と樹脂と泥土を混ぜたものを用い、衣装は其中で煮沸して染色される。

トラジャ社会では、何れの階級を問わず、衣服形態は、日常・非日常共に同じ形態である。

したがって葬儀の場合、日常着をそのまま即座に黒く染めることが可能であり、これは、衣服所持枚数の少ない民族の、巧妙な生活の知恵から生まれた生活文化なのであろう。

### 2) 妻の葬儀衣装

図2は村長の妻の葬儀衣装である。

図3-㉑、㉒は、上衣・下衣共に素材は絹である。ブラウス (ブラウス) の構成は、図4-㉑に示すように無駄のない直線裁ちで、肩山は輪で縫い目がない。衿肩は直線に明けられ、衿

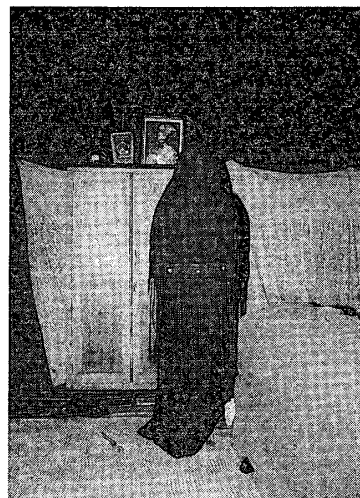


図2 村長の妻の葬儀衣装

肩明きから左右にそれを折り曲げて見返し仕立てにし、衿肩明きは幅5cmの見返しを付けた簡単な構成のもので、自分の手作りである。

ブロース（ブラウス）のデザインは、地紋のもの（図3-a）や、金彩文様が施されているもの（図3-b）等がある。金彩技法の技術は、インドから入って来たものであり、東南アジアでは銅を多く含んだ赤味の深い金が好まれており、村長の妻の上衣の金箔は、多分この系統のものであろう。

下衣のDodo（腰布）の構成は、幅99cm、丈126cmの筒型である（図4-c）。その巻き方は、体を幅の中央に据えて、余った左右の余裕を前中央に向けてヒダをとり、上部に挟み込む。それが、歩行時、または開脚時の運動量となる着法なのである。

これらの衣服は、村長の妻、つまり貴族であるため素材は絹であるが、平民階級では、すべて木綿の衣服である。絹や木綿は、ウールに比べて非常に軽い。また、日中の気温の暑い時には涼しく、夜

の寒い時には暖かいという、気候風土によく適合した素材である。スレンダー（肩掛け）は、木綿であり、無地や水玉文様等がある。その構成寸法は、幅41cm、丈118cmである（図4-b）。

図3-cはトピーママサと呼ばれる、木綿の葬儀用かぶり物である。幅28cm、丈75cmに、40cmの房が付けられている（図4-d）。これは、配偶者が死去した場合に、葬儀中はひとときも離さずかぶり、弔意を表すのである。

図3-dは服飾品の手提げである。これは、トラジャの織り物で出来ており、その構成寸法は、図4-eに示すとおりである。これを持つことにより、正装の姿となる。

## 2. 供物献上品を持参する村人達（参列者）

図5は各村から供物献上品を持参する村人達、即ち参列者を示したものである。

トラジャ族は、インドネシア独特の相互扶助意識（共同体共通の自発的な支援努力の精神）で、このことをゴトンロヨン精神というが、これを持つため、固く結ばれた共同体を構成している。これが葬儀の際に、はっきりと示される。

どこかの家族が葬儀を行わなければならない時、村中の人々が牛や豚、鶏、あるいはトゥアク（ヤシ酒）を入れた竹筒、米等の贈り物を持って現れる。葬儀は、その家族の財政事情に応じ



① 地紋のあるブロース・Dodo  
無地のスレンダー



② 金箔文様のあるブロース・Dodo  
水玉のスレンダー



③ トピーママサ  
（葬儀用かぶり物）



④ 手提げ

図3 葬儀用衣装

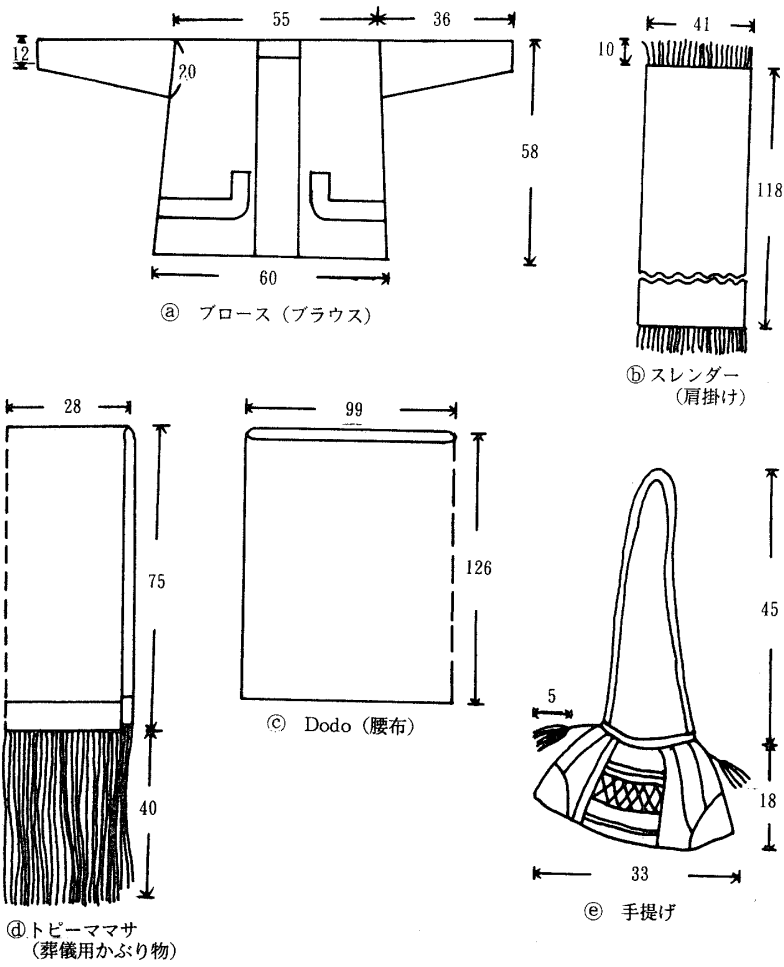


図4 葬儀用衣装の構成寸法

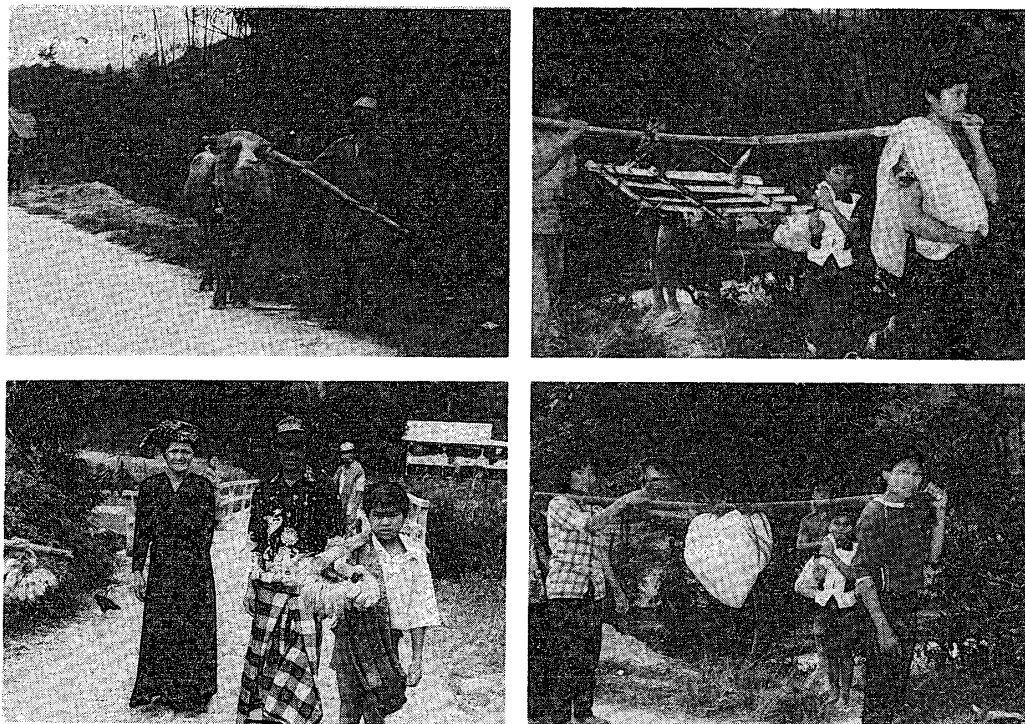


図5 供物献上品を持参する村人達

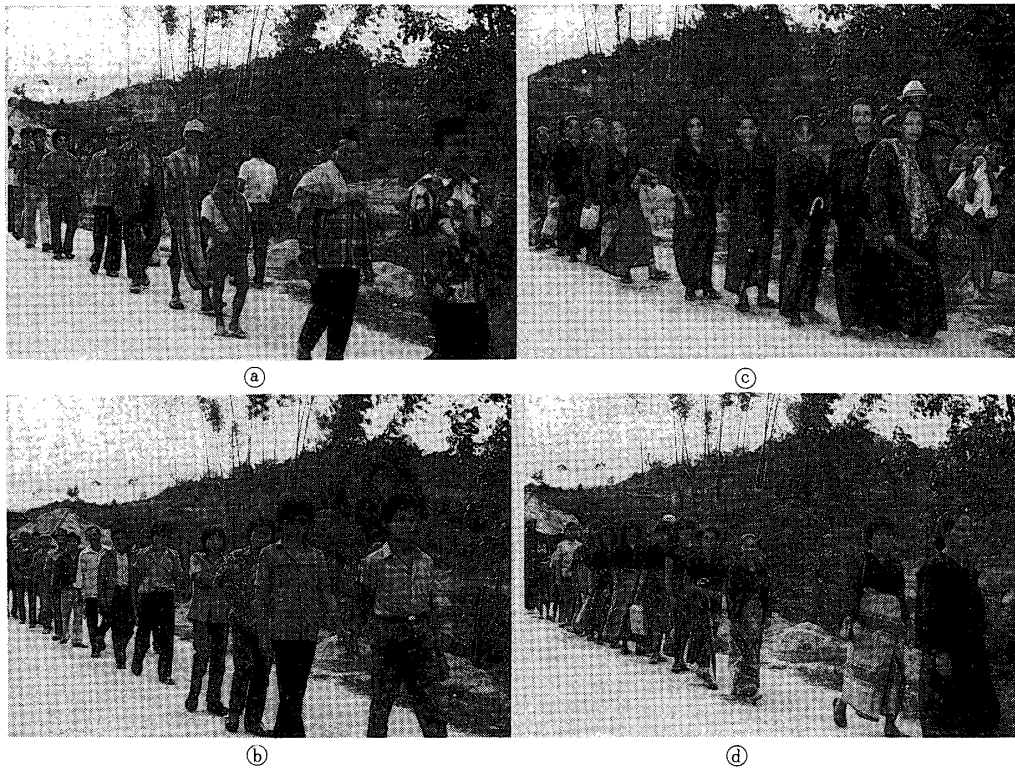


図6 葬儀参列のため列をなしてその家に向かう人達

て、1日だけのこともあれば、1ヵ月続くこともあるが、葬儀の大小の区別なく、すべての人が参列できる収穫期にだけ行われる。

トラジャ族の価値観は、来世の天国を主におき、例えば今生きているのも、すべて来世の天国のためであり、自分が死んだ時、家族が行ってくれる葬儀によって、即ち生贄（水牛・豚）を出来るだけ多くすることによって天国に行ける。この世で貧乏なのは当たり前、すべては来世のためにやっているのだからという、人生最大の幸福追求の儀式が葬儀であると、彼等は考えているのである。

### 3. トラジャ族の世界観に基づく供物生産体系

表1はトラジャ族の世界観に基づく供物生産体系を示したものである。

トラジャ族の世界観は、第1報で述べたように、宇宙そのものが両極的であり、男性は天、女性は地と関連づけて考えられている。供物生産体系にも、その思想が明確に表われ、男性は地上の仕事、即ち家畜の世話や高木果実の採取等であり、女性は地にはう仕事、即ち塊根類の生産を行っている。

### 4. 葬儀参列者の衣装

図6は葬儀参列のために列をなして、その家に向かう人達である。その列には、村長の親族の貴族もいれば、平民階級からの参列者もいる。何れも男女別・階級別に、一列に列をなして参列する。それらの人達の衣装について、次に述べる。

#### (1) 男性の衣装

図6-a, bは男性の葬儀参列者の衣装を示したものである。

上衣はバジュ（開襟シャツ）、下衣はチェラナパンジャン（長ズボン）を着用しているのがみられる。それに加えて中には、Sambuk（腰巻）を肩掛けにしている者もみられる。これは朝夕

表1 トラジャ族の世界観に基づく供物生産体系

男性(天)		女性(地)
水牛	家畜	米
豚		トウモロコシ
鶏		タロイモ
やしの実		ヤムイモ
バナナ		キャッサバ
コーヒー		ピンロージュ

の気温の冷え込む時に、頭部からすっぽりとかぶり、また、就寝時には毛布の役も果たす等、実に巧みに使いこなすために身に付けているのである(図7)。その形態は、幅117cm、丈145cm内外の筒形である(図8)。この衣服形態は、貴族・平民・使用人共にまったく同形態である。



図7 Mamasa 地方における朝夕の冷えを防ぐためのSambuk (腰巻)の用い方

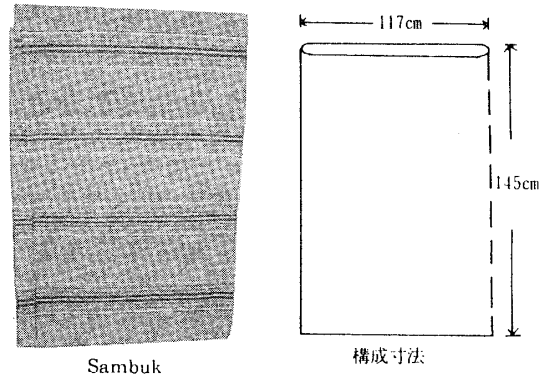


図8 Sambuk (腰巻)

## (2) 女性の衣装

図6-③、④は女性の葬儀参列者の衣装を示したものである。

上衣はブロース (ブラウス)、下衣はDodo (腰布) を装着している。男性は、すべての人が下衣にズボンを着用している姿が見られたが、女性には、それに匹敵するスカートの姿が一人も見られない。これは、トラジャ族の性役割・生理的機能面・気候風土等によるものと考えられる(第8項にて詳述)。また、女性の衣服形態も、男性同様に、貴族・平民・使用人共に同じ形態である。

## 5. 葬儀の過程

### (1) 歌や踊り・酒盛りの葬儀

葬儀参列者による供物献上品は、すべて記帳される。これは、受けた恩義を大切にする証である。生け贄の豚は、図9のように竹に固定され、庭に並べられる。



図9 生け贄の豚

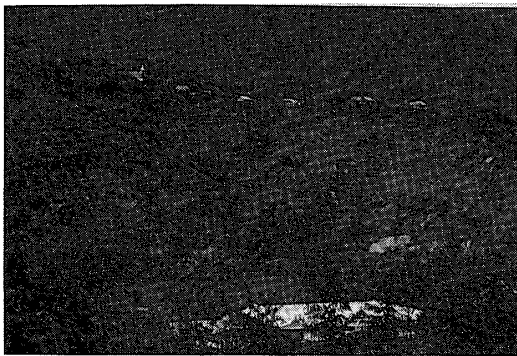
供物献上品がすべて記帳されると、儀礼的な歌や踊りが始められる。そして村長の家から遺体を運び出し、凄まじい叫び声と共に、それを空中に数回ほうり上げた後、北枕に地面に置く。これは、村長の死を確信するための儀式である。

遺体は再び村長の家に戻され、葬儀は歌や踊り、生け贄の肉で酒盛りが1ヵ月間も行われる。それが終わると、弔問客は自分達の家に戻るが、遺体はまだ埋葬されない。

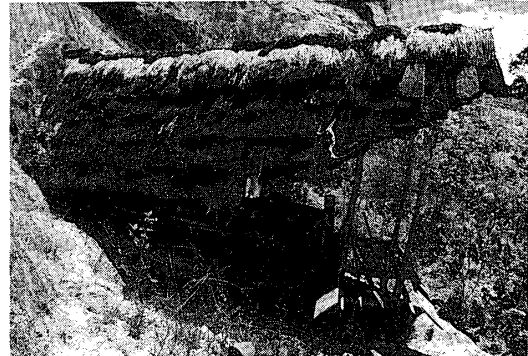
### (2) トラジャ族の埋葬

トラジャ族の埋葬法は、実に独特であり、岩壁にロコマタ (墓) (図10) を作って埋葬する。

トラジャ族の多くは、既にキリスト教徒やイスラム教徒になってはいるが、いまだアニミズム (祖霊崇拜) を信じている。死者の魂の昇天を容易にしようと、ロコマタは岩山の高



㉑ 山上にあるロコマタ



㉒ ロコマタの拡大写真

図10 トラジャ族のロコマタ（墓）

い場所に作られる。墓穴を掘るのは、すべて手作業のため、1年から3年位かかり、その費用も、作業者全家族の生活費と、水牛3頭であり、莫大にかかる。

ロコマタ（墓）が出来ると、埋葬の儀が行われる。村長の遺体を木製の担架に乗せ、人々はそれを揺り動かしながら、ロコマタへ運んで行く。その仕事を分担するのは、参列者の中から選ばれて行われるので、その人々の衣装は、前述した第4項と同じである。

ロコマタに到着し、遺族が村長の遺体をさすって最後の別れを告げると、遺体は葬られる。その晩、最後の酒盛りが行われ、翌朝、弔問客は帰って行く。遺族の女達は、白い糸を腕に巻き、黄色い帯を頭に巻いて、葬儀の終了を示すのである。

表2 トラジャ族村長の家の衣服所持状況

		和名	スラウェシ語名	実数	備考			和名	スラウェシ語名	実数	備考		
母	上半衣	ブラウス	ブロー	5	・衣服はすべて母親がミシンで手作りする。手型紙は作らない。方法は代々母親から教わる。 ・生地は、乗り合いバスでママサ、あるいはウジュンパンダンへ行き購入する。	息子	上半衣	半袖シャツ	クメジャー	10	上衣は白 下衣は灰色		
		ブラジャー	ベガ	10				Gパン	Gパン	5			
	下半衣	腰布	ドド	4			下半衣		長ズボン	チェラナパンジャン		4	
		パンティー	チェラナダラム	10				パンツ	チェラナダラム	4			
	47才	儀礼服	葬儀用衣装上下				15セット	学校の制服	学校の制服	チェラナラスコラー		3セット	1つは学校用
			結婚式用衣装上下				10セット		服飾品	帽		子トピー	2
才	服飾品	靴	スパト	2足	靴	靴	スパト	4足					
		葬儀用かぶり物	トビーママサ	1		息子	上半衣	Tシャツ	バジュカウス	5			
	手提げ		1	開襟シャツ	バジュ			4					
娘	上半衣	Tシャツ	バジュカウス	6	息子	下半衣	長ズボン	チェラナパンジャン	6	16才			
		ブラジャー	ベガ	10			半ズボン	チェラナパンジャン	4				
	下半衣	長ズボン	チェラナパンジャン	6		下半衣	パンツ	チェラナダラム	4				
		スカート	バワハン	5			学校の制服	学校の制服	チェラナスコラー		2セット		
	24才	下半衣	半ズボン	チェラナパンジャン		4		服飾品	首飾		リカルー	2	1足は学校用
			パンティー	チェラナダラム		30	靴		スパト		4足		
才	服飾品	靴	スパト	4足									
		指輪	チンチン	1									

<家族>

父：(1928~1988年・60才で没)1953~1981年まで村長。  
母：47才  
子供：11人(男7人・女4人)  
祖母：電力局長をしていた。

衣服の収納 → 箆筒

## 6. トラジャ族村長一家 (貴族) の衣服所持状況

表2は葬儀の行われたトラジャ族村長一家の衣服所持状況を示したものである。ここでは、村長の妻 (47才)、娘 (24才・学生)、息子2名 (20才・16才・学生) の4名の所持枚数を例示した。

衣服調査の内容は、日常着の上衣・下衣、儀礼服、服飾品についてである。

### (1) 村長の妻

1) 妻の日常着は、ブロース (ブラウス) が5枚、Dodo (腰布) が4枚である。しかし、バワハン (スカート) は1枚も所持していない。また、下着は、ベガ (ブラジャー)、チェラナダラム (パンティー) が各々10枚と、上着に比べて2倍の枚数を所持している。下着を多く所持しているというのが、貴族階級の特徴となっている。

2) 祭儀のための儀礼服は、葬儀用衣装上下が15セット、結婚式用衣装上下が10セットと、葬儀用衣装と結婚式用衣装の所持枚数に、顕著な差がみられる。これは、トラジャ族の人生の中で、葬儀が幸福追求の最大の儀式であると考えられている故、葬儀に如何に大きな比重をかけているかが、この所持枚数からも伺える。

3) 服飾品の所持について見ると、トピーママサ (葬儀用かぶり物)、手提げ、各々1枚である。スパト (靴) は2足で、伝統服の時は裸足であるため、これは着用しない。Ujung Pandangへ買い物に行く時のみ着用する。

### (2) 娘

娘の衣服所持状況は、バジュカウス (Tシャツ) と、バワハン (スカート) を5~6枚と、同数位を所持しており、ベガ (ブラジャー) 10枚、チェラナダラム (パンティー) 30枚と、上着に比べて下着が枚数多く所持していることがみられる。これは、母親と同傾向であり、貴族の衣服所持傾向の特徴であろうと考えられる。

### (3) 息子

息子2名の衣服所持状況は、バジュカウス (Tシャツ)、バジュ (開襟シャツ)、Gパン、チェラナパンジャン (長ズボン)、何れも4~5枚であり、20才の息子はクメジャー (半袖シャツ) を10枚所持している。下着も、チェラナダラム (パンツ) 4枚の所有がみられ、現代の日本の若者と変わらない所持衣服である。

以上、娘はDodo (腰布)、息子はSambuk (腰巻) を1枚も所持していないが、これは、Ujung Pandangでの現在の学生生活が、当面トラジャの伝統的社会生活からは切り離された生活であるために、これらの伝統服は、必要としないためであろうと考えられる。

また、村長一家の衣服の収納方法は、図11に示すような箆筒が用いられている。貴族階級の家では、すべてこの収納方法である。

## 7. 平民家庭の衣服所持状況

ここでは、平民家庭の衣服所持状況について述べる。

平民家庭では、衣服の所持枚数も少なく、着のみ着のままか、洗濯着替えのための最低必要枚数の所持である。このことは、トラジャの社会構造上から類推することが出来る。即ち、家屋の居住形態・財産の共同管理・階級制度・およびト

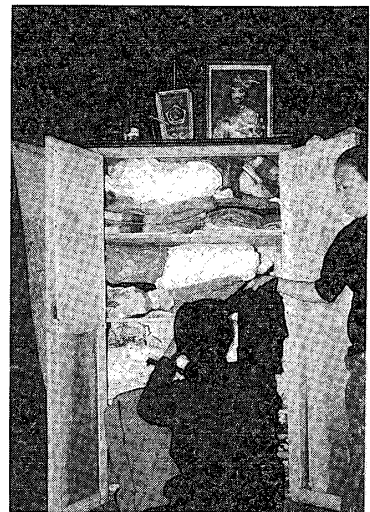


図11 衣服収納箆筒 (貴族)



ラジャ族の人生観等（第1報において詳述）により、平民家庭は、必然的に所有衣服枚数は少ないのである。

### 8. 伝統的社会構造と男・女服装との関連

以上、トラジャ族の男女の非日常の服装について述べてきたが、ここではその服装が、トラジャ族の伝統的社会構造との間に、如何に密接な結びつきがあるかについてふれることにする。

トラジャ族の男性は、すべての人がズボンに開襟シャツの西洋的スタイルへの移行が認められたが、女性は、男性に反して、すべての人がDodo（腰布）とブラウスの伝統的スタイルの服装である。そのことは、第1報で詳述したトラジャ族の伝統的社会構造の中の世界観からくる男性優位の思想が、衣文化変容への対応にも大きく影響しているものと考えられる。

トラジャ族の性役割は、世界観に基づき、上界は男性、下界は女性と関連づけて考えられているために、男性は高木果実の採取・牧畜・耕作・会議であり、女性は塊根類の耕作・採取、育児・洗濯・料理等であることから、これらの役割分担に、服装が機能するか否かが大きくその服装の定着に影響しているものと考えられる。

1970年代頃より異文化が流入し、まず男性がズボンを採用した。性役割からくる男性の仕事には、従来のSambuk（腰巻）よりも、ズボンの方が動的で、牧畜・乗馬に適し、高木果実の採取時の負傷防止にも、機能を発揮した。また、用便時の生理的機能面や、朝夕の気候にも、より適合性を見出し、ズボンが定着したものと考えられる。

一方、男性に次いで女性も異文化の流入に対して、スカートを採用したが性役割である塊根類の耕作・採取、洗濯等、下肢屈曲の姿勢に対し、スカートは、下肢部を被覆することは不可能であった。しかし、従来のDodo（腰布）は、スカートと比較にならぬほど、丈・裾幅の寸法が大であるために、どのような姿勢にも対応出来、下肢部を被覆することが可能である。

また、育児においては、Dodoが新生児の産着にもなり、背負う時の子守りばんてんにもなるのである。夜は毛布としても使用出来る。

また、トイレの設置の無いくらしの中では、用便時に女性にとって、下肢を被覆することは、衣服として重要な要素になってくると考えられる。

以上の理由から、トラジャ民族の社会構造の中で、スカートは成立し得なかったのであろう。

斯くして、Dodo（腰布）は、異文化の流入にも左右されずに、厳然と、伝統的社会構造の中で存続し得たのである。

### ま と め

スラウェシ島、南スラウェシ Mamasa 地方に住む、トラジャ族村長一家の葬儀をとおして、葬儀用衣装について調査し、併せて伝統的社会構造と衣生活との関連について分析考察した。要約は次のとおりである。

1. 村長の屍衣は、純白の布地を数百メートルも体に巻き付ける。布の長さは、死者の階級区分によって異なり、その後、赤い美しい布でくるまれ、大きな木の幹のように仕上げられる。

2. 現在のトラジャ族の葬儀衣装の衣服形態は、主催者側・参列者側共に階級の如何を問わず、同形態が認められる。その衣服形態は、男性は、すべての人がズボンに開襟シャツの西洋的スタイルへの移行がみられるが、女性は、男性に反して、すべての人がDodo（腰布）にブラウスの伝統的スタイルである。これに主催者側は、死者の配偶者のみ、トピーママサ（葬儀用かぶり物）をかぶるが、何れも色はトラジャ社会のマボロンの慣習により、黒を着用する。しかし、参列者の衣服の色柄は、男女共、自由である。

3. トラジャ族の伝統的社會構造は、その世界観により、男女の性役割等、社會慣習が確立している。即ち、上界は男性、下界は女性と関連づけて考えられており、その思想の中には男女の位置づけが明確に枠組みされ、認識されている。したがって、男性の性役割は、高木果実の採取・牧畜・耕作・會議であり、女性は塊根類の耕作・採取、育児・洗濯・料理等である。このような伝統的社會構造と、現在の上記の衣服体系との関連をみると、男性の異文化受容のズボンについては、従来の Sambuk (腰巻) よりも動的で、牧畜・乗馬に適し、高木果実の採取時の負傷防止・用便時の生理的・気候風土にも、より機能の適合性が見出され、ズボンが定着したものと考えられる。一方、女性のスカートは、性役割である塊根類の耕作・採取、洗濯等の下肢屈曲の姿勢に対し、民族服の Dodo (腰布) より、丈・裾幅の寸法が不足のため、下肢部を被覆することは不可能である。これに対して Dodo は、あらゆる姿勢にも対応可能であり、育児面においては、それが産着や子守りばんてん、毛布等、また生理的機能面、および気候風土に対する適合性等、多機能を有した衣服なのである。斯くして、トラジャ族の社會構造の中では、スカートは容易に受容成立し得なかったのであろうと考える。

以上、トラジャ社會の現在の男女の衣服体系は、社會構造との間に不可欠の關係がみられ、異文化の流入に対しても、伝統的社會構造との関わりにおいて、賢明な選択をし、下衣に、男性はズボン、女性は Dodo (腰布) を衣服形態として成立させたものと考えられる。

## 文 献

- 1) 石川栄吉：南太平洋の民族学，182～189，角川書店（1978）
- 2) リー・クーンチョイ：インドネシアの民族，46～64，サイマル出版会（1979）
- 3) エドワード・エバンズ＝プリチャード：世界の民族，10，東南アジア島嶼部，97～99，平凡社（1979）
- 4) ヴォルフ・キーリッヒ：世界の民族と生活，11，インドネシア，112～121，ぎょうせい（1981）
- 5) 吉本 忍：インドネシア染織大系（上），311～317，紫紅社（1987）
- 6) 財団法人繊維意匠センター：東南アジアの繊維意匠，128～129，ナニワ印刷所（1959）

## Summary

By the observation of the funeral of the village headman of Toraja tribe, lives in Mamasa area of southern Sulawesi island, the funeral clothes were researched and the relation between them and the traditional organization of the society was studied. The results are as follows.

- (1) As the corpse clothes, white cloth of several hundred meters is winded to the body. The length of the white cloth is different by the rank of the corpse, and thereafter it is finished as like a trunk of the red beautiful cloth.
- (2) The funeral clothes of the sponsor and the attendance are the same irrespective of rank. The clothes of the male all shift to western (style of) pants and open-necked shirts, but the female all wears the traditional Dodo (loin cloth) and blouse. Further, only the wife of the dead puts on a black Topimamasa (funeral head-dress) based on Mabolong custom in Toraja society. The color of the clothes of the attendance is free both male and female.
- (3) In the traditional organization of the society of Toraja tribe, based on its view of world, the social custom is established as the sexual role of male and female. That is, the upper world is related to male and the lower world to female and the position of male and female is fixed and recognized clearly. The roles of male are gathering of the fruits of high trees, carttle breeding, cultivation and meeting and of female are cultivation and gathering of taro, childcare, washing

and cooking etc. By the study of the relation between such traditional organization of society and abovementioned clothing system, it is considered as follows. It is considered that the western pants of male are more active than the old Sambuk (loin cloth) and are fit for cattle breeding, riding and the fitness of function is discovered such as for the prevention of injury in case of gathering fruits of high trees, physiological convenience in case of going to the closet and the climate, and as a result the pants are fixed. On the other hand, the female's skirt is impossible to cover the legs in case of the position of bending legs such as cultivating and gathering of taro and washing, since the length and bottom width of the skirt is smaller than the racial clothes, Dodo (loin cloth). Dodo matches all postures and in case of childcare it changes to clothes for a new-born baby, nurse livery and blanket etc. and has the physiological function and the fitness for the climate. Dodo is the multi-functional clothes. So it is considered that the skirt is not accepted easily to the society of Toraja tribe.

As mentioned above, the relation is observed between the present clothing system of male and female in Toraja tribe and its social organization. And it is considered that to the inflow of foreign cultures Toraja tribe makes its wise selection in relation to its traditional organization of society and male's pants and female's Dodo are completed as the bottom clothes system.